自選　荷風百句

永井荷風

青空文庫

自選　荷風百句序

わが発句の口吟、もとより集にあむべき心とてもなかりしかば、書きもとどめず、年とともに大方は忘れはてしに、おりおり人の訪来りて、わがいなむをも聴かず、短冊色帋なんど請わるるものから、是非もなく旧句をおもい出して責ふさぐことも、やがて度重るにつれ、過ぎにし年月、下町のかなたこなたに佗住いして、朝夕の湯帰りに見てすぎし町のさま、又は女どもと打つどいて三味線引きならいたる夜々のたのしみも、亦おのずから思返されて、かえらぬわかき日のなつかしさに堪えもやらねば、今はさすがに棄てがたき心地せらるるものを択みて、老の寐覚のつれづれをなぐさむるよすがとはなしつ。

昭和丑のとし夏五月

荷風散人

春之部

墨(すみ)も濃(こ)くまづ元日の日記かな

正月や宵寐(よひね)の町を風のこゑ

暫(しばらく)の顔(かほ)にも似たりかざり海老(えび)

羽子板や裏絵さびしき夜の梅

子を持たぬ身のつれ〴〵や松の内

九段坂上(うへ)の茶屋にて

初東風(はつこち)や富士見る町の茶屋つゞき

まだ咲かぬ梅をながめて一人(ひとり)かな

清元なにがしに贈る

青竹(あをだけ)のしのび返(がへし)や春の雪

市川左団次丈煙草入(ちやうたばこいれ)の筒に

春の船名所ゆびさすきせる哉(かな)

自画像

永き日やつばたれ下(さが)る古帽子(ふるぼうし)

浅草画賛

永き日や鳩も見てゐる居合抜(ゐあひぬき)

柳嶋(やなぎしま)画賛

春寒(はるさむ)や船からあがる女づれ

葡萄酒(ぶだうしゆ)の色にさきけりさくら艸(さう)

紅梅(こうばい)に雪のふる日や茶のけいこ

出(で)そびれて家にゐる日やさし柳

　銀座裏の或(ある)酒亭にて二句
よけて入(い)る雨の柳や切戸口(きりどぐち)

傘さゝぬ人のゆきゝや春の雨

　妓楼の行燈(あんどう)に
しのび音(ね)も泥の中なる田螺(たにし)哉

室咲(むろざき)の西洋花(ばな)や春寒し

日のあたる窓の障子(しやうじ)や福寿草(ふくじゆさう)

うぐひすや障子にうつる水の紋(あや)

色町や真昼しづかに猫の恋

画賛

門の灯や昼もそのまゝ糸柳

石垣にはこべの花や橋普請

送別二句

笈を負ふうしろ姿や花のくも

行先はさぞや門出の初ざくら

鼬鳴く庭の小雨や暮の春

行春やゆるむ鼻緒の日和下駄

春惜しむ風の一日や船の上

夏之部

夕風や吹くともなしに竹の秋

よし切や葛飾ひろき北みなみ

待つ人の来ざりしかば
水※さへ待てどたゝかぬ夜なりけり

築地閑居
夕河岸の鰺売る声や雨あがり

御家人の傘張る門や桐の花

明やすき夜や土蔵の白き壁

青梅(あをうめ)の屋根打つ音や五月寒(さつきさむ)

八文字(はちもんじ)ふむや金魚のおよぎぶり

荷船(にぶね)にもなびく幟(のぼり)や小網(こあみ)河岸(がし)

四月十八日

物干(ものほし)に富士ややをがまむ北斎忌(ほくさいき)

芍薬(しやくやく)やつくゑの上の紅楼夢(こうろうむ)

卯(う)の花や小橋(こはし)を前(まへ)のくゞり門

百合(ゆり)の香(か)や人待つ門(かど)の薄月夜(うすづきよ)

蝙蝠(かうもり)やひるも燈(ひ)ともす楽屋口(がくやぐち)

石菖(せきしやう)や窓から見える柳ばし

一ツ目(ひとめ)の橋や墨絵のほとゝぎす

　向嶋水神(すゐじん)の茶屋にて
葉ざくらや人に知られぬ昼あそび

散りて後悟(のち)るすがたや芥子(けし)の花

わが儘(まま)にのびて花さく薊(あざみ)かな

あぢさゐや瀧夜叉姫(たきやしやひめ)が花かざし

拝領の一軸古(いちぢく)りし牡丹哉(ぼたんかな)

涼しさや庭のあかりは鄰(となり)から

枝刈りて柳すゞしき月夜哉

涼風(すずかぜ)を腹一(はらいつ)ぱいの仁王かな

鞘(さや)ながら筆(ふで)もかびけりさつき雨

五月雨(さみだれ)の或夜(あるよ)は秋のこゝろ哉

住みあきし我家(わがや)ながらも青簾(あをすだれ)

蚊ばしらを見てゐる中(うち)に月夜哉

藪越(やぶご)しに動く白帆(しらほ)や雲の峯

中洲(なかず)眺望

深川(ふかがは)や低き家並(やなみ)のさつき空

みち潮(しほ)や風も南のさつき川

妓(ぎ)の持ちし扇(あふぎ)に気に入らぬ髪結直(ゆひなほ)すあつさ哉

秋近き夜(よ)ふけの風や屋根の草

秋之部

蘭(らん)の葉のとがりし先(さき)や初嵐(はつあらし)

稲妻(いなづま)や世をすねて住む竹の奥

女の絵姿に
半襟(はんえり)も蔦(つた)のもみぢや窓の秋

四谷怪談画賛四句

初汐(はつしほ)や寄る藻(も)の中(なか)に人の骨

樒(しきび)売る小家(こいへ)の窓や秋の風

人のもの質(しち)に置きけり暮の秋

川風も秋となりけり釣(つり)の糸

象(ざう)も耳立てゝ聞くかや秋の風

鯊(はぜ)つりの見返る空や本願寺(ほんぐわんじ)

庭下駄(にはげた)の重きあゆみや露の萩(はぎ)

かくれ住む門(かど)に目立つや葉※頭(はげいとう)

浅草や夜長の町の古着店

糸屑にまじる柳の一葉かな

病中の吟

粉薬やあふむく口に秋の風

降り足らぬ残暑の雨や屋根の塵

秋の雲雨ならむとして海の上

引汐や蘆間にうごく秋の雲

物足るや葡萄無花果倉ずまひ

芝口の茶屋金兵衛にて三句

盛塩の露にとけ行く夜ごろかな

柚(ゆず)の香(か)や秋もふけ行く夜の膳(ぜん)

秋風や鮎(あゆ)焼く塩のこげ加減(かげん)

小波(さざなみ)大人(うし)追悼

極楽(ごくらく)に行く人送る花野(はなの)かな

妓の写真に

吉日(きちにち)をえらむ弘(ひろ)めや菊日和(きくびより)

行秋(ゆくあき)や雨にもならで暮るゝ空

秋雨(あきさめ)や夕餉(ゆふげ)の箸(はし)の手くらがり

雨やんで庭しづかなり秋の蝶(てふ)

昼月(ひるづき)や木(こ)ずゑに残る柿(ひと)一ツ

冬之部

初霜や物干竿(ものほしざを)の節(ふし)の上(うへ)

降りやみし時雨(しぐれ)のあとや八ツ手(や で)の葉

釣干菜(つりほしな)それ者(しや)と見ゆる人の果(はて)

箱庭(はこには)も浮世におなじ木(こ)の葉(は)かな

古足袋(ふるたび)の四十(しじふ)もむかし古机(ふるづくゑ)

代地河岸の閑居二句

北向(きたむき)の庭にさす日や敷松葉(しきまつば)

垣越しの一中節や冬の雨

よみさしの小本ふせたる炬燵哉

小机に墨摺る音や夜半の冬

冬空や麻布の坂の上りおり

門を出て行先まどふ雪見かな

雪になる小降りの雨や暮の鐘

湯帰りや燈ともしころの雪もよひ

窓の燈やわが家うれしき夜の雪

寒き夜や物読みなるゝ膝の上

冬ざれや雨にぬれたる枯葉竹（かれはだけ）

襟（えり）まきやしのぶ浮世の裏通（うらどほり）

落（おち）る葉は残らず落ちて昼の月

落残（おちのこ）る赤き木（き）の実（み）や霜柱

荒庭（あれには）や桐の実つゝく寒雀（かんすずめ）

昼間から錠（ぢやう）さす門（かど）の落葉哉

冬空や風に吹かれて沈む月

寒月（かんげつ）やいよ〳〵冴（さ）えて風の声

小松川漫歩三句

あちこちに分るゝ水や村千鳥（むらちどり）

寒き日や川に落込（おちこ）む川の水

大根（だいこ）干す茅（かや）の軒端（のきば）や舟大工（ふなだいく）

下駄買（か）うて箪笥（たんす）の上や年の暮

麻布閑居

座布団（ざぶとん）も綿（わた）ばかりなる師走（しはす）哉

行年（ゆくとし）や鄰（となり）うらやむ人の声

青空文庫情報

底本：「麻布襍記　――附・自選荷風百句」中公文庫、中央公論新社
　　2018（平成30）年7月25日初版発行
底本の親本：「荷風全集　第十四巻」中央公論社
　　1950（昭和25）年10月25日発行
初出：「おもかげ」岩波書店
　　1938（昭和13）年7月10日
※「灯《ひ》」と「燈《ひ》」の混在は、底本通りです。底本の親本、「おもかげ」岩波書店1938年7月10日第1刷発行、「おもかげ」岩波書店1938年7月30日第2刷発行、「荷風句集」細川書店1948年2月25日刊行では、「灯」に統一されています。
※表題は底本では、「［＃割り注］自選［＃割り注終わり］　荷風百句」となっています。
※ルビの誤植を疑った箇所を、「荷風全集　第二十巻」岩波書店、1985（昭和60）年4月5日発行の表記にそって、あらためました。（底本の「編集付記」に「難読と思われる語には岩波書店版『荷風全集』等を参照し、新たにルビを付した」とあるので）
入力：kompass
校正：砂場清隆

2020年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

自選　荷風百句

永井荷風

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/